

第34回安全工学シンポジウムの開催にあたって

第19期日本学術会議 人間と工学研究連絡委員会
安全工学専門委員会 委員長 向殿 政男

安全工学の分野で，伝統と歴史のある日本学術会議主催の安全工学シンポジウムが，今年も例年通り開催される運びとなりました。本シンポジウムは，回を重ねて今年で34回目を迎えます。今回は，日本機械学会を幹事学会として，「社会の安全の落とし穴を探る」をメインテーマとして，開催されます。最近，我が国では，安全，信頼を揺るがす事故，事件が多発しております。このような状況から，政府は，安全，安心な社会の構築を目指す科学政策を掲げています。本シンポジウムが，安全工学の立場を中心に，安全，安心な社会の構築に関する幅の広い活発な議論が繰りひろげられる場となることを，強く希望しています。

本シンポジウムは，1970年に第1回を安全工学協会を幹事学協会として開催して以降，毎年，日本学術会議の安全工学専門委員会を主催として，40数余の学協会の共催で開催されてきました。その中で，安全工学協会，日本機械学会，日本化学会，日本建築学会，土木学会，電気学会，そして1996年からは日本人間工学会が加わり，7学会が幹事学協会として，本シンポジウムを持ち回りで，ボランティアベースで開催してきました。安全工学に関する総合的な我が国唯一のシンポジウムとして，これまで，独自の役割を果たして参りました。毎年のシンポジウムでは，各幹事学協会主導でその時代に即したメインテーマが決められ，企画から実施まで，各幹事学協会が主体的に運営をして参りました。これまで，安全工学専門委員会は，基本的には全体的なゆるい取り纏め以外，それほど強いコミットメントをして参りませんでした。

安全技術は，その基本的な特質上，現場に立脚した分野個別的な性格を強く有しています。このことが各学協会それぞれの専門の立場から安全の問題に取り組むことになり，安全工学全般に関しての統一的な学会が存在しにくい理由にもなっていました。安全工学は，どのような工学系学問分野にも，必ず係っています。まさしく，安全工学は，工学の全分野にまたがる，横断領域的な学問分野であり，この点から，40数余の安全関連の学協会が共催する本シンポジウムが果たして来た役割は，大変大きなものが有りました。一方で，安全工学には，明らかに共通の理念，共通の技術や構造，考え方が有ります。更に，安全工学は，工学や技術だけでなく，社会科学や人文科学とも強く関連した総合的な学問であり，総合的，俯瞰的観点が必須な学問でも有ります。この点を鑑み，安全工学専門委員会は，今後は，総合的，統一的，俯瞰的観点から，安全工学シンポジウムに対しても，更に積極的な役割を果たして行きたいと考えております。皆様のご理解とご協力をお願い申し上げます。

最後になりましたが，本第34回安全工学シンポジウムの幹事学協会をお引き受け頂き，素晴らしい企画から運営・実施までを一手にお引き受け頂いた日本機械学会の企画委員会の皆様，本シンポジウム実行委員会の皆様，及び，ご協力頂いた関係各位に深く感謝を申し上げます。